

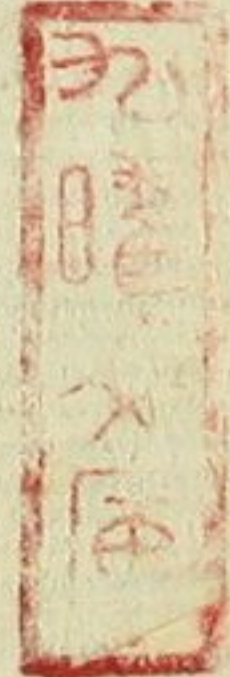
初編  
笠亭仙景作  
一勇齋國芳画

初<sup>むつ</sup>氏<sup>ト</sup>雅<sup>おさみ</sup>  
葎<sup>とび</sup>東<sup>つづまの</sup>源<sup>せん</sup>

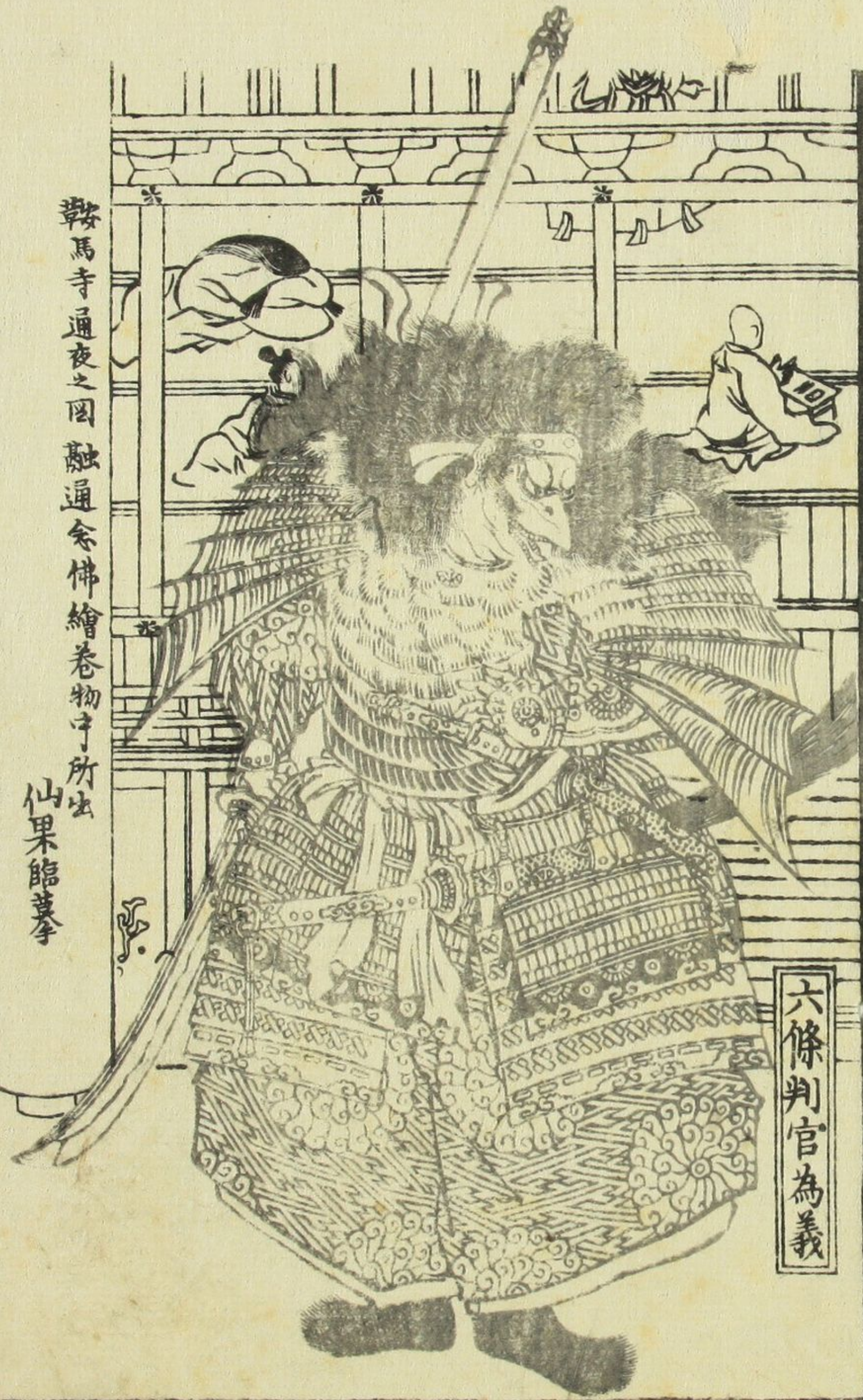




或云治世小乳と忘まぬハ倒さぬ前小乳正衛冬々々改婦の乳迄と書か  
 盛成と見を纏と舛ハ尻と撤て後沈者焼とも合得た持波橋ハ本へさね成つた  
 せん腹らうとも竹の馬小乳おち登てりとも長カを履半世も赤御さまは時ハたまけ小乳  
 知えと用意まも毛被物見ると考つて着ていけはる儼々まおれと云は下の説  
 きた倒さぬ木の柱を減らぬ此のゆゑ流るり灯流を要もあまて屋間小乳  
 物買されど除り下をいふれもど様合う一言もせん僕かひけり唯りて迄  
 ても推さざる忘まぬやう小と教ふるあらん小傍のさだの將小俊身ハ痛を忘れ  
 くの純子の夜おのせ世界を悲ひ清粘や軍をばさるも修の所の老翁を耳小とぬ皮  
 ぶままで程の腹軟痛痛を温り程に脚の火燈は飛ぶ是樂民の解されど田舎  
 女田極の目わけ様さぬりのいふ汁を毎豆のさ根のりともなや新物ゆの湯ハ卵湯  
 湯湯の湯ハはと吹来薄も肝小松ト忘まぬやう小下見とてせやん小若  
 程え長命をわらふ程茶茶とらつ治世小乳と忘まぬ所おれんとてぬ理屋口  
 後出の程をわらふ程茶茶とらつ治世小乳と忘まぬ所おれんとてぬ理屋口  
 あり左小書つくとあふもあふをわらふ程茶茶とらつ治世小乳と忘まぬ所おれんとてぬ理屋口



鞍馬寺通夜之圖 融通念佛繪卷物中所示  
仙果館藏



六條判官為義



源氏金蓮牛若丸

惟源氏東國初旅

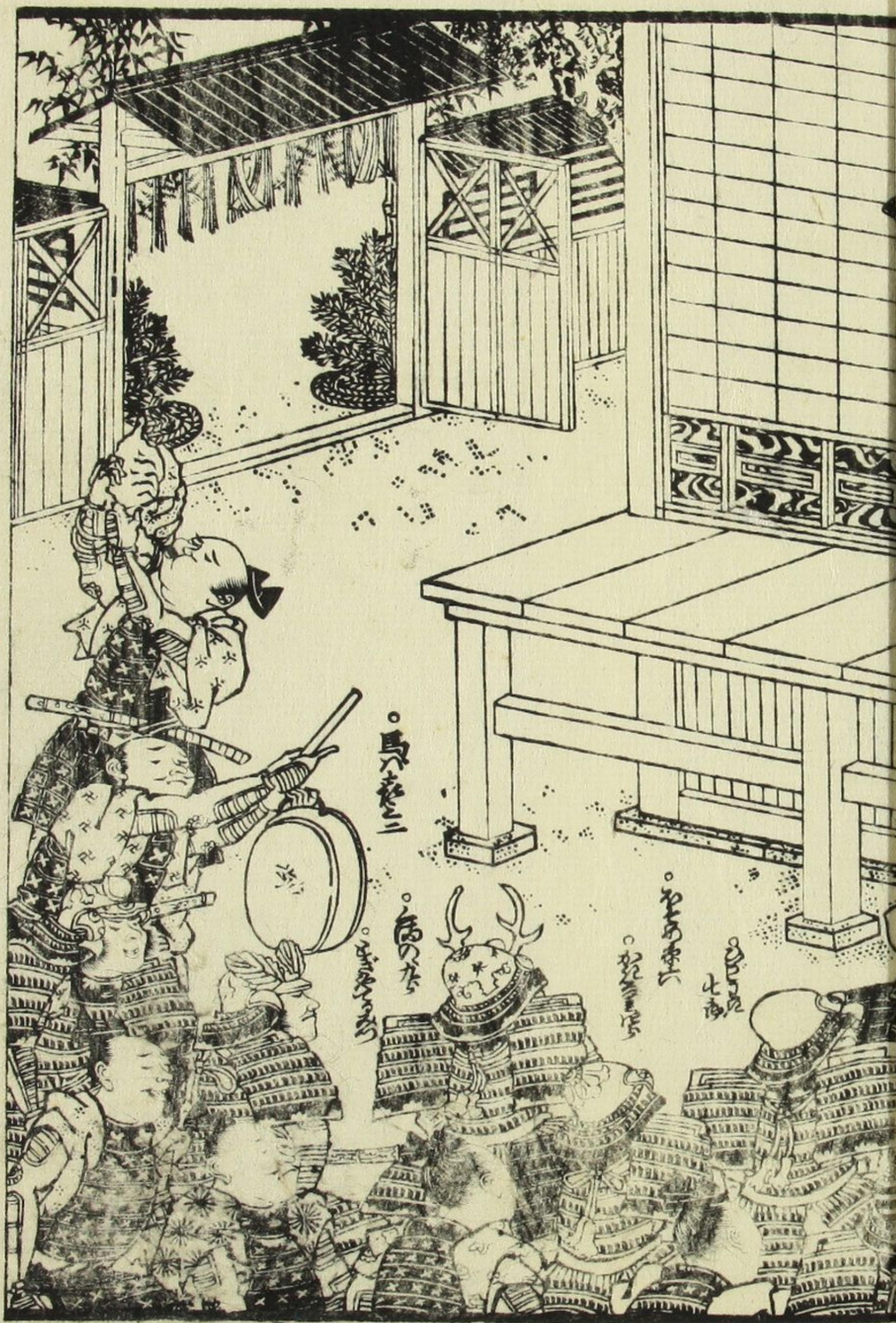
惟源氏東國初旅... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り...

一問前(惟源氏)あるがれ海と云ふ侍小孫具成と云ふ... 二人のつら小孫具成連まひ... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り... 惟源氏の流不従は佐下たる形義朝臣と云ふ取一人掛り...



侍衛門の固もやぶとぬきて平家も勢多の戦敗れも敵小房ぬさるるがごとく我  
ひて書をたてておぼしめしあはれ退きしひあまの御氏と致集り再び軍を起さん  
小村の守令を命へ居延のふたはるるの勇れはあはれ多しこの二家の御氏  
中四郎揚りし勇士も二十餘人ありしや政重の南に居りしは後醍醐天皇  
平山退きし令も上候の命かきしらぬたれも悲しく一勝が千騎の別りの  
一あはれは侍衛門をさしぬれぬ細かき事とて今も留守の御氏も  
後公の四方方に勇気おしすてさせしは六十一歳すも其も先とありし  
終るんとするむはれとて思はれしは六十一歳すも其も先とありし  
けし勝も負も武門のありしは六十一歳すも其も先とありし  
むひもたつたぬえひも六十一歳すも其も先とありし  
さるるのんまも揚られしは六十一歳すも其も先とありし  
いざにたつ二島相本は華紙ゆきしは六十一歳すも其も先とありし  
心ち武士とて人の情をたれ推察せしは六十一歳すも其も先とありし  
も相ひぬきては六十一歳すも其も先とありし  
るはさるる在りしは六十一歳すも其も先とありし  
さるるを制するは六十一歳すも其も先とありし

あまの御氏もついでに公もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
教せられ奉致かの用意のひあはれ多くおせかてすのこも生未致振さるる  
言く一は公もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
も是れは御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
ひるはれも御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
おれしは御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
物く生未致振さるるは御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
とて集令し一鬼門小向く割りと揚げ湯宴するは御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
中入来は御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
まも御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
み合ふは御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
のけし御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
の二御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
慈愛も御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇  
とて御意もついでに僕も今一は御意不用言せし後醍醐天皇



○馬の音

○馬の音

○馬の音

○馬の音

○全ん  
太郎の  
よるひ

○義朝  
よるひ  
よるひ

○義朝  
よるひ  
よるひ

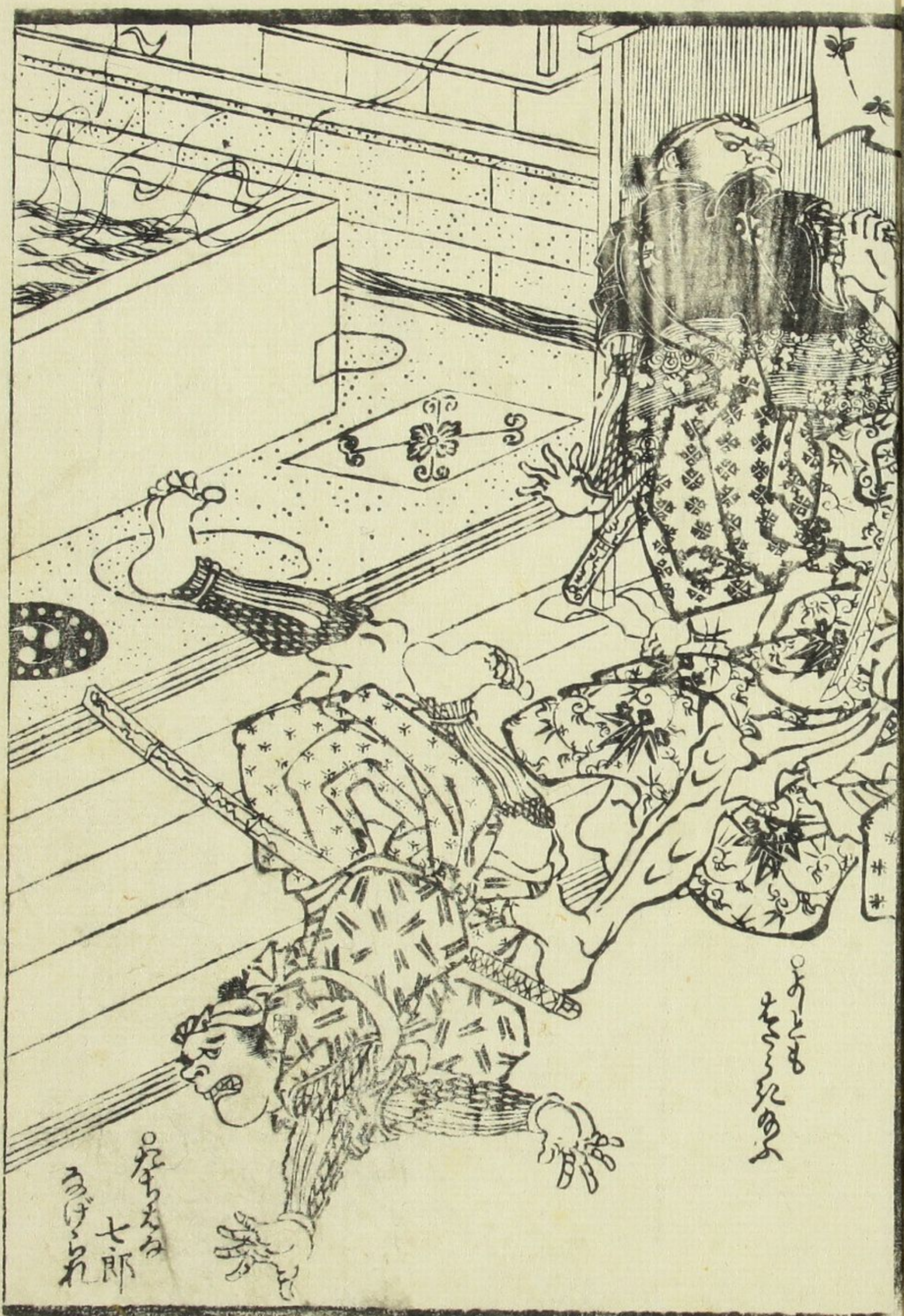
○義朝  
よるひ  
よるひ

○義朝  
よるひ  
よるひ

君也小統々々と操練せしるるはあち果ては種々新設せしめしと聞く胸を忍びてのせ  
小僧ふがやくとさるべきは勇力も亦体小元納せりしやといふ人の名もあかすを用い  
そのふくいのほう子親せし務めびとを不月小松へ責よりん志々くあすさんぐるま華  
威をせしむ 徳世の九中集 一外のだい 徳世はあちのれ 運はく恥る武志の  
一容と名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
柄のた力えはつきり徳世はわかつせり 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
さひとも一研名輝光「まん中」に居ても北原在場へてふのうたはなも場の積二二名の村名  
さすの日はもく今より君へのさすも徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
果もろくせしと情を死あけあての揚を速出し後朝ますくは徳世の教えしれ  
も物の奥徳しつろなるうらた徳世を詳せんあんちうぐ十はまるを風を徳れ八徳へ  
武運初めの代名小朝ちうゆり一金五九と名を徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
さぬんせしと名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
まん小もひらきつゆわくもせしせさるる湯飯びききも幸ひ今日せまけれど由  
志年建久のまき人さび入るびくも君のいさうにさるる徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
あんまひさるる徳世の奥徳もせしせさるる一と名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華

のまはるる徳世の奥徳もせしせさるる一と名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
徳世の奥徳もせしせさるる一と名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
一の風をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
かへはまされまきと小橋を毎とくを玉手奴のた力あり小徳の下に徳世はあちのれ  
いさつと刀の月小佩のまはるる湯飯へて入るる徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
へまのせしと名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
の湯飯をさんとしのふあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
すると力小まるせと名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
と小徳うがよる徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
かる徳世の奥徳もせしせさるる一と名をいひししれからて細目承承骨する 一標の中世お秀の板すたは徳華  
のごく行も小徳除けは七が徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
打らむむらも徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
私の名徳もある小も徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
あちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
小徳むらも徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎  
徳世はあちのれ 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎 一色を毎





おやぢ  
七郎  
まげり

おやぢ  
まげり



おやぢ  
まげり

おやぢ  
まげり





九郎

九郎

四郎

太郎

三郎

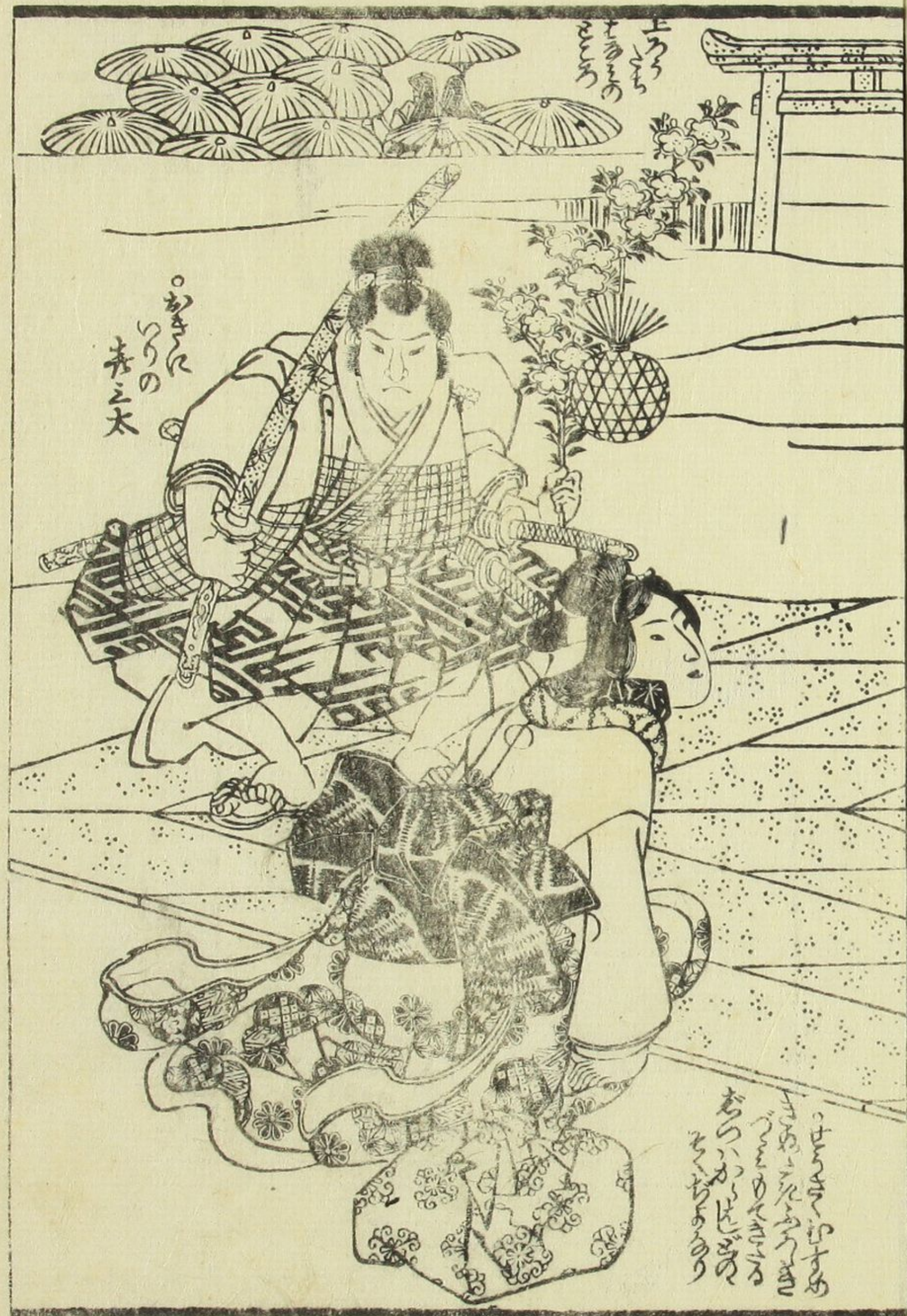


三の巻 二つ返りあふ成つし世帯子のあふむし洋装のままで出候アと云ふ君ハ一人故に  
 人車れどかひも波はうへてもよるおとどきえのまじはれは放逐由一に心射を公の  
 あまう一見小車板を肩せりあつて初歩をさりさるるまゝ人許も小あむとつひ  
 いかりてと見ゆらじおち勢も憂ゆつらん長国を病めあすの軍兵を注ごうかまけり  
 唐の漢刀小一人もさびさてもおち死奴承るるとなりく口さふ結物ゆゆ合五九す  
 一かすくもあさき長国めをまじはれは病小帯まわせせたるを死を産後より依勢あり  
 別敵を初小はふしまきまき前とせとよりかむががあゆかれは正君ハいつらなる  
 せりふとあむわがなたかたはたふちのあやを小はみんりのあやませど交勢小あむわの  
 こころの山苗の子の如勢ふとまきまき大くかきく舟はてのまじはれはあふひ言歌  
 浮きまゝも公の如の如勢とまきまきといひまきまきけり○こころ苗村の苗と人あはれ  
 いれし言先法神の如くもあふまきまき戒名をさるる書付小あむわそつて初歩は海  
 せりあつてのまきまきと接接し公あつて産後一病うらまじし経は産後危いとあふひくまき  
 はずけ初歩まわらせんと初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 門御のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 双のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 めくあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩

抱返りまきまき湯田の妻と何ゆ名と初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 多りのあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 他打のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 らばうりてまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 とまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 きくまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 中一のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 かとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 らばうりてまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 依のあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 だりあつとまきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 身をも初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩  
 一先小に人許まきまき初めけれど帯はうりて作らるるを利公の折ゆありあつて初歩













〇からしだいり  
 寺後谷  
 ついで



〇  
 〇  
 〇

〇  
 〇  
 〇

〇  
 〇  
 〇

〇  
 〇  
 〇



○からしあつひ  
 きたる  
 つめよす

まりぬさるさうどかうけ送るうまぐり遊人と務きまてもおさんむらり父さん  
 尤出北人のあふれよの氣に成るなる能きまのまのうらまのこゝね家かめお  
 せゆと投擧して大事やあつねいこのゆが具かさんとからうてわらまふさうら川て  
 物々事々もちとあふれよ東光坊すやゆととてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 どささ一とらちあふれよひなまなり四乳をのうがよふおあおゆいぞあらうちひささ  
 この重下このふゆれお藤すのとするゆるる思と小女の世帯は務きおりじり  
 年改せの一今やもこく昔友とあつねわてと親らば何れあめんどう一ちひよもあ  
 りぬ事さるさうどかうけ送るうまぐり遊人と務きまてもおさんむらり父さん  
 のゆが具かさんとからうてわらまふさうら川て物々事々もちとあふれよ東光坊  
 時どつらとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 とらちあふれよひなまなり四乳をのうがよふおあおゆいぞあらうちひささ  
 えと長く候りて候もあはれと送すいかりの牛乳とてあつねわてと親らば何れあめん  
 目の候りて候もあはれと送すいかりの牛乳とてあつねわてと親らば何れあめん  
 遊のまのうらまのこゝね家かめおせゆと投擧して大事やあつねいこのゆが具か  
 とその候りて候もあはれと送すいかりの牛乳とてあつねわてと親らば何れあめん  
 産不産めらじ抱ひのよおふ人言さるさうどかうけ送るうまぐり遊人と務きまても  
 産不産めらじ抱ひのよおふ人言さるさうどかうけ送るうまぐり遊人と務きまても







西塔武藏坊  
辨慶像



弁慶  
三編のちゆめ  
ら

